

※ PDF 内のリンクをクリックすると
GoogleMaps の地図が開きます。



3万年もの昔から噴火を繰返し、今日の美しい山容となった男体山。
中禅寺湖越しに見る姿は日光のシンボルでもある。

勝道上人によって開山された 関東の一大霊地・日光

酒本
幸祐

「日光を知らずして結構と言うなかれ」確か日光の観光パンフレットに、このようなキャッチコピーがあったと思う。

これは壮麗な東照宮に掛けてのものだと思う。しかし真の日光といえるのは、奈良時代末から平安時代初めの、僧・勝道上人によって開かれ、日光の歴史は始まっている。

東照宮ははるか後の、江戸時代初め、元和2年(1616年)徳川家康の死去によって始まる。家康の遺命により駿河の久能山に埋葬し、一周忌を待つて日光に改葬され、最初の日光東照宮は二代将軍秀忠によって創建された。この時、家康の遺骸は久能山に残し、分霊を勧請したとの説もある。

また家康は生前に、日光開山の勝道の創建した寺が発展した輪王寺の貫主に、天海を任じている。天海は天台宗の高僧で、家康の知遇を得て、家康晩年は参謀としての立場にあった。天海は家康の権力を背景に、日光山を牛耳る勢力を持っていた。

三代将軍・家光は春日局に養育され、親である秀忠、豪との折合いが悪く、天海を父のように慕っていた。そのこともあってか、寛永13年(1636年)に東照宮大造営が始まり今日の壮麗な社殿となった。東照宮の説明が長くなったが、勝道の開山よりはるか後のことだといいたかっただけである。



大谷川にかかる朱塗りの神橋。永い時間の中で、水流によって岸は削られ切り立っている。

今回の旅は、勝道の足跡を訪ね、関東の一大霊地といわれ、日光修験が盛んだった地に立ち、いくばかでもその空気にふれてみたいとの思いからだった。日光は数度訪ねているが、物見遊山で訪ねた時とは気構えが違う。

今回はいつにもなく、出発前に多くの資料に目を通していった。

まず勝道について紹介しておく、奈良時代後期の天平7年(735年)に生まれ、平安時代初の弘仁7年(816年)83歳で死去するまで、詳しい記録があり、多くの伝説もある。この時代の人としては、珍しいことだと思う。

勝道は下野国(現・[栃木県真岡市](#))で、下野介の若田高藤を父とし、母は豪族の吉田連氏の娘・明寿とされている。二人にはなかなか子供ができなく、[伊豆留\(現・栃木県出流町\)の千手観音](#)に祈願して勝道を授かったという。

勝道は少年期から山林修行を続け、天平宝宇6年(762年)27才の時、[下野薬師寺](#)の如意僧都に師事して沙弥戒、具足戒を受けたとされる。この頃から勝道は活発な動きをみせはじめた。3年後の天平神護元年(765年)に[出流山満願寺](#)(現・栃木市)を創建している。出生のことからか、満願寺の本尊は千手観音である。現在この寺は坂東三十三観音霊場の17番札所となっている。

勝道は、満願寺創建の翌年、日光の地へと出発するのであるが、その理由については手持の資料にはない。そのことが気になっていたのも、この旅の2日目、[男体山の裏側の明智平](#)で客待ちをしていたタクシー運転手に聞くと、栃木市からも男体山はよく見えるといった。

このことから小説風を書くならば「勝道は山林修行を続けているうち、北方遠くに優美な山容をもつ



勝道上人を供養するために建てられた開山堂。

男体山を見て、そこに観音菩薩の浄土を感じ、必ずやこの山に登ろうという思いが強くなったのである」ということになるだろうか。

勝道の足跡を訪ねるべく、平地では春めいてきた4月3日から2泊3日の旅程で出発した。

午前9時半、気温は低いが晴天には恵まれ、[東武日光駅](#)に到着した。駅前には国道が日光山地へと上り勾配で、一直線に続いている。以前の経験から、神橋までは30分ほどと考え、朝の元気で歩くことにした。

日光市内は坂の町で、国道を下った鬼怒川流域を底地として、日光山地へと広い裾野を登り、社寺のある山内の手前を流れる大谷川に突き当たった辺りから山地へと変わっていく。ここに神橋がある。

30分ほども登ると、左側に朱塗りの鳥居と神橋があった。神橋は渡ることができなく正に神橋である。現在は、少し離れた所に神橋と平行して立派な橋がある。

勝道と弟子たちもこのルートに登って大谷川に着いたと思われる。現在は立派な国道があるが、いかに山林修行をしていたとはいえ、勝道たちにとって原生林のルートは困難だっただろう。

勝道たちが大谷川に着いた時のことについて伝説が残っている。

大谷川に着いた勝道たちは、川の激流を前にして対岸に渡ることができず困っているとき、首からどくろ觸臚を下げた異様な姿の神が現われ、「我は深沙大王である」と名乗った。大王は2匹の大蛇を出現させ、兩岸を結ぶ橋となって、勝進たちは無事対岸に渡ることができた。

現在の神橋はその場所に架っていて、別名、やますげのじゃぼし山菅蛇橋ともいわれ、神橋の北岸には深沙大王の祠がある。

勝道は対岸の50mほど登った場所に聖地を見付け、千手観音を安置する寺を建てた。この地から男体山に向って紫の雲がたなびいていたことから、紫雲立寺といったが、後に**四本龍寺**と改めた。この寺が輪王寺へと発展した。

現在この地には、この後に建立された**二荒山神社**の本宮神社と、四本龍寺は観音堂となり、三重塔が残っている。

勝道の足跡を訪ねることは初めてで、大谷川を渡ってからは、日光観光協会が制作した「日光ウォーキングガイド・滝尾の路」が頼りだった。先ず勝道が最初に入った四本龍寺から入り、真言宗の宗祖・空海が創建したという**滝尾神社**まで、勝道の足跡を歩く予定だった。

ところが、このガイドが分かりづらかった。また現地の案内標識などはほとんどなく、最初から失敗の連続だった。

大谷川沿いの道から山内への進入路が2本あるのだが、手前の道を登った。200段ほどの歩き難い石段を昇り切ると、「輪王寺・東照宮」と書いた矢印看板があった。目的地を通り過ぎて、山内に入ってしまったのだ。

勝道たちが、最初に入った場所は、日光山内といわれる土地の東の端にあり、現在二社一寺といわれる山内は、後に西に広がったのだ。滝尾の路は東側を北方山中へと進む道だった。

ここまで来たら、四本龍寺は帰路に寄ることにして、ガイドを見ながら北方にコースをとり進んだ。しかし日光山内の敷地は広く、尋ねる人もいない。そんな時、広い舗装された路を、作業服姿で見事な

白馬に乗って下ってくる中年の男性に会った。たぶん東照宮の神馬を運動させていたのだろう。手を上げると、白馬は4足をピタッと揃えて止まった。よく調教された馬だと感心した。馬上の男性に道を教えてもらい、ようやく途中から滝尾の路に入ることができた。

山内を離れると道は雑木林のゆるい登りの一本道だった。舗装されて歩きやすいハイキングコースともなっていた。この道を歩く人はほとんどなく、3人ほどの欧米系の男のハイカーに会っただけだった。晴れているが、進むほど気温が下がってくるのが分かった。

しばらく進むと左手の木立の中に朱塗りの建物が見えてきた。これが開山堂だった。石の鳥居を入ると**正面に観音堂があり、隣りが開山堂**だった。

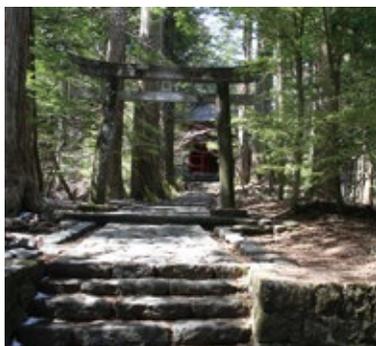
開山堂は勝道没後、仏岩谷で荼毘に付され埋葬されていたが、東照宮鎮座の時、ここに勝道供養の靈廟として建立され、墓もここに移されている。

隣の観音堂は**香車堂**とも呼ばれていて、将棋の香車は直進しかできないことから、この駒を借りて自宅の神棚で祈ると、安産できるとの信仰がある。2つの堂とも無人ということもあろうが、整備が行き届いているとはいえ、木立に囲まれた境内は暗く、淋しいものがあった。

再びウォーキングガイドを頼りに、次の目的地である**滝尾神社**に向った。開山堂の前の一本道を進めば右側に見えるはずだった。ガイドを信じて右側ばかりを注視しながら登った。しかし行けども行けども右側に滝尾神社はなかった。躊躇したが、ともかくもう少し、沢筋に沿って進んでいったが、道が



開山堂の隣りに建つ観音堂。駒の香車が印象的だった。



滝尾神社への参道。どこか淋しい参道だった。



滝尾神社神門脇から本殿を見る。木々に埋れる感じで建っていた。



二荒山神社本殿。山内の賑やかさはなく落ち着いた空気があった。



勝道上人が最初に入った地に建つ本宮神社拝殿。

大きく左にカーブして山中に入っていくようになった。ここで間違っていると思い、引き返すことにした。しかしずいぶんと来ていた。

下りは上りの反対側に注意して歩いていると、沢筋のかなり風化した木の看板に、滝尾神社と書かれたのを見付けた。その前の橋を渡ると、滝尾神社の入口の階段に出た。それにしても無駄な時間を費やしたものだと思った。午後1時になっていた。

滝尾神社は小高い山中にあり、下から見ることはできない。玉石を並べて作った階段には落葉が積り、昇り難い階段だった。途中石の鳥居を抜けながら10分ほど登ると、古色然とした立派な神門が見えた。神門を入ると正面に朱塗りの社殿がすっぽりと山に囲まれるようにあった。折からの冷え込みで、狭い境内にはうっすらと雪が積もっていた。弘仁11年(820年)に空海によって創建されたといわれ、たごりひめのみこと田心姫命を祀っている。現在の建物は江戸初期のものだ。

勝道が日光に入り創建した四本龍寺が日輪寺へとなったが、当初の日輪寺は滝尾神社の近くにあったという。すると、日光に入った空海は晩年の勝道とこの地で会っていると思える。勝道は空海に日光山についての文章を依頼し、弘仁5年(814年)空海は「沙門勝道碑文」を作成している。

4月3日は日も良いので、この日に二荒山神社を正式参拝したいと思っていたので、神社に急ぐことにした。

下り坂を山内の方向に向って進むと、輪王寺の裏側に出た。この辺りにくると平日でも多勢の観光客で賑わっていた。二荒山神社は山内西の端にあり、東照宮への砂利敷の広い参道を横切って、東照宮の高い石垣に沿って進むと、神社の東側に出た。歩いていると勝道が深く関わる輪王寺、二荒山神社の間

に東照宮が強引に割込んだ形がよく分かる。

午後2時過ぎ、飲まず食わずで歩き続け、二荒山神社の境内に着いた。

境内は広いのだろうが、山内の広さを見ているので、実感がつかめない。本殿は西の端、下の国道からの大きな参道の正面に、山を背にして建てていた。本殿正面以外は砂利敷で、境内を囲んで社務所や授与品所などが建ち、いずれも簡素なものだ。他と比べ観光客も少なく、落ち着いた空気があった。

二荒山神社の別宮である滝尾神社、まだ訪ねていない本宮神社を合せ日光三社権現といわれている。

社務所を訪ねて正式参拝をお願いしたが、結婚式が行われていて、午後3時からしかできないといわれた。ここで1時間のロスは困ったと思っていたが、神職の計らいで、結婚式の雅楽が聞こえますがよければと、30分繰り上げてくれた。

本殿内に入って、形式通りの参拝ができ、内陣では後2日ある旅程の無事を祈った。一般的に榊を奉奠するのだが、二荒山神社では榊に代わって檜の葉が使われていた。

観光ガイドに、山内に勝道上人の像があるとあったので、参拝の後、神職にそのことを尋ねると、神橋の所にあると教えてくれた。

山内の雑踏を避け、神社正面の参道を国道まで下り、大谷川に沿って下った。山内も広がったが、当然、神橋までは遠かった。ようやく神橋に着いて、勝道上人の像を探したがなかった。そこにあったのは高い台座の上の天海大僧上の像で、がっかりした。神職が勘違いしたのだろう。

まだ4時前で明るく、今朝一本道を間違えて失敗したので、隣の石段を上がってみると、石の鳥居が見えた。奥に朱塗り堂があったが無人で、境内も雑然としてデコボコであり、枯葉が積もっている。



本宮神社の裏に建つ四本龍寺跡の観音堂と三重塔。

人影も全くない。

たぶんこの社が本宮神社なのだろうと思った。そうすれば、この近くに四本龍寺が現在観音堂になっていて、三重塔もあるはずだと思った。しかし木立に囲まれた境内は薄暗く、明日も神橋の前を通過のだから、再度来ることにして国道に下りた。

神橋近くからバスに乗り、今夜の宿のある東武日光駅まで戻った。駅の売店で缶ビールを買い、駅前のベンチに座り流し込んだ。山中や山内には売店など一切なく、飲まず食わずで、朝から7時間、ほとんど座ることもなく歩き続けたことに、小さな自信が生まれた。

翌朝、心配していた足も問題なく動き、晴天で、昨日より気温も上がってきた。

東武日光駅前からバスに乗り、一気に神橋まで進んだ。昨日、下見していた本宮神社への階段を上った。昨日は夕方薄暗かった境内は明るく、異なった印象があった。石の鳥居の先に朱塗りの本宮神社があった。参拝順が逆になったが、拝殿の階段を上り参拝した。本宮神社は、勝道が男体山に登頂8年後に、二荒山神社を祀った最初の神社だ。境内には枯葉が落ちたままで、神様も悲しいのではと



明智平からの男体山。裏側になるが崩落がはじまっていて、山の荒々しさを感じる。

思った。拝殿の裏に本殿があり、その裏に四本龍寺跡が観音堂として三重塔と並んで建っていた。ここでも明確な道順が示されてなく、境内整備も充分でなく、心淋しいものがあった。

勝道たちが日光に入り、この地を拠点として男体山登頂を試み、昨日歩いた滝尾の路へと足跡をのびしていった。

男体山登頂は困難を極め、2度失敗、3度目に成功した。このことは資料に詳しいので紹介する。

勝道は日光の地に入った翌年、神護景雲元年（767年）雪解けを待って男体山の登頂を試みたが失敗した。14年後、2度目の登頂を目指すも、この時も失敗した。

翌年、続けて登頂を試みた。3度とも春であり、草木の茂る前が登頂に適しているのだろうか。

3度目で登頂に成功したが、この時、勝道は山麓で17日間の読経の後「三宝を山頂に捧げ、日光山の神霊を礼拝し、衆生の安寧を願いたい。善神・毒龍・山魅に登頂の助を得たい。自らは山頂で菩提の境地に至りたい」との誓願をしたという。登頂後は誓願通り、37日間、日光山の神霊を礼拝したという。

登頂に成功した勝道は、観音菩薩の住むとされる補陀洛山に因んで、この山を二荒山と名付け、後に二荒から日光と呼ばれるようになり、これが日光の地名の始まりといわれている。

四本龍寺跡に立って、これらのことを思い起したが、昨日訪ねた滝尾の路といい、日光開山の発祥の地が、あまりにも寂れているようで、輪王寺や東照宮の賑わいを見るほどに、残念な気持ちだった。



二荒山神社の中宮祠入口の唐銅の鳥居。

神橋から中禅寺に向うバスに乗った。中禅寺湖畔にある二荒山神社の別宮、中宮祠に参拝する予定だった。

いろは坂を登る途中の、明智平ロープウェイの乗り場で途中下車した。ここは男体山



神門から続く屋根付きの参道と中宮祠本殿。

神門越しに神体山である男体山を望む。美しいだけでなく神々しさを感じる。

の裏側にあり、展望台まで上れば、遠くに中禅寺湖が遠望できると期待していたのだが、展望台は低く、期待した通りの景色は見えなかったが男体山には少し近づけた気がした。男体山の裏側は急斜面で、崩落が始まっていて、山塊の荒々しさに圧倒された。

いろは坂を昇り切ると中禅寺湖に突き当たる。湖沿いの道をバスで5分ほど進むと、[二荒神社中宮祠](#)前のバス停に着いた。下車すると正面に唐銅の立派な鳥居があった。

今夜の宿はここから近く、まだ午後3時過ぎで明るく、鳥居をくぐった。30段ほど石段を上がると神門があり、下段の境内に出た。その先の石段の上に、朱塗りの立派な神門があり、木々に囲まれた社殿が見えた。その奥にご神体でもある男体山が見え、美しい景色となっていた。

この辺りは冬季は雪深いためか、境内に神門から社殿へと屋根のある参道があった。境内は広くはないが、神門を入った時に、凜としたものを感じ、気持ち洗われるようなここちよさがあった。男体山からの気に満々ている思いがした。

[社殿を参拝した後、あまりの気持ちよさで、境内を歩いて時間を潰した。](#)

境内を去り難く時を過ごしたが、宿も近いので、翌朝、朝の空気の中で再度参拝しようと思い、本殿に深々と一礼して宿に向った。

3日目も快晴で、気温もまた上がってきて、標高の高い[中禅寺湖畔](#)でも寒さは感じなかった。しかしここにきて、初日の激歩で足に痛みを感じはじめたが、歩き始めると治るだろうと、9時に宿を出た。

宿も湖畔にあり、5分ほどで中宮祠の境内に入った。朝の空気の中で、朱塗りの神門が鮮やかだった。

境内も爽やかな空気が満々でいて、昨日よりも中宮祠の社殿の背に聳える男体山の神を強く感じた。昨日は気付かなかったが、本殿右の境内に鳥居があり、奥に

登拝門があった。この日は扉が閉じられていたが、毎年5月5日から10月25日まで開かれていて、ここから男体山へと登っていく。山頂には二荒山神社の奥宮があり、約4時間ほどかかると聞いた。また毎年7月31日には、関東一円から多勢の行者や信者たちが集まり、午前0時に登拝門を通して山頂を目指すのだという。ここには、かつての日光修験が脈々と生きている気がした。

中宮祠を後にして、中禅寺湖の対岸辺りにある[中禅寺](#)に向った。この時期は中禅寺へのバス便がなく、湖に沿って30分ほど歩くと中禅寺に着いた。この辺りからは湖越しに山裾を広げた美しい男体山を見ることができる。

男体山は約3万年前から活発に噴火を繰り返し、現在の山形を形成したという。標高2,484mと三角点に設置されているそうだが、近年の調査でそれより2m高いことが分かった。

中禅寺湖は、2万年前に男体山が噴火した時できた堰止湖で、1週25kmあり、この大きさとしては日本一標高の高い場所にある湖である。勝道が男体山登頂の時、原生林に囲まれたこの湖を発見したといい、湖の小島の上野島には勝道の遺骨の一部が納められているという。

中禅寺は、寺伝では延暦3年(784年)勝道が船で湖上にいた時、千手観音の姿を感得して、桂の立木に千手観音を彫り、この立木観音菩薩を本尊としたのが寺の始まりという。

当初は二荒山神社の神宮寺として、男体山登拝口近くにあり、補陀洛山中禅寺とされた。(現在の二荒山神社中宮祠とされていたが、明治の神仏分離により輪王寺の別院になった。その後、明治35年の大山津波で堂ともども湖に流されたが、本尊の千手

観音は無傷で湖上に浮んでいて、現在の観音堂に祀られている。

中禅寺は坂東三十三観音霊場 18 番札所であり、参拝するのは今回4度目であった。本堂は山門を入れて左側にあった。寺僧に案内され本堂に入り、千手観音の前に立った。参拝の時は、少し見上げるほど大きい観音の顔を見続けた。というのは、以前3回参拝した時は、顔も像も荒削りだったと思っていたからだ。今、目前にある観音は、柔和な表情で荒削りといった感じがしなかった。そのことを隣りにいた寺僧にいうと、「観音様は全く変わっていません。それは貴方の心が変わったからでしょう」といった。人とは、何であれその時々的心持ちによって、見え方が異なるものだろうかと思った。

11時に中禅寺を出た。この後、20分ほど歩くと勝道が発見した華厳ノ滝があり、滝を見て下ろうと考えていた。

歩きながら輪王寺に寄っていないことが気になってきた。当初から輪王寺は徳川幕府から厚い庇護を受けて、徳川色が強過ぎると避けていたこともあった。しかし勝道の足跡を訪ねるのであれば、輪王寺には行くべきだろうと思い、華厳ノ滝の手前から、バスで一気に神橋へと下った。

男体山に登頂し日光を開山した勝道は、寺を建て仏を祀り、神社を建て神を祀り、山と仏と神が習合する山岳宗教の礎をつくった。空海もこの地を訪ね、勝道没後、天台宗の高僧・円仁(慈覚大師)が輪王寺の三仏堂(現・本堂)や常行堂、法華堂などを整え、こうして日光修験として確立された。

その構成は以下のとうり。男体山・大己貴命・千

手観音。女峯山・田心姫命^{たごりひめのみこと}・阿弥陀如来。太郎山・味相高彦根命^{あじすきたかひこねのみこと}・馬頭観音。こうして日光三山とか日光三所大権現と呼ばれ、鎌倉時代の頃に日光修現は隆盛となっていった。

ところが戦国時代、輪王寺は壬生氏の傘下に組み込まれ、豊臣秀吉の小田原征伐の時、北条側に加担したことで、寺領を没収され衰退した。江戸期になると徳川家康の命で、天台宗の高僧・天海が日輪寺に入り、徳川家の庇護のもと復興することになった。このことで、それまで輪王寺は天台宗・真言宗の調和がとれて存在したが、天台宗に変わってしまった。そこに東照宮が割込んできて、明治の神仏分離令、修験道廃止令など、日光山の宗教観が変容してしまった。山岳宗教を根本に考えた勝道は何を思うのだろう。

バスの運転手の配慮で、神橋手前のバス停で下り、輪王寺に向った。東照宮への広い参道の右側に、山門はなく輪王寺を示す太い石柱のある入口から入った。境内は広く左手中央部に、高い石階段の上に、重層の大きな本堂である三仏堂があった。平成の大修理がほぼ終わった感じで、拝観券を求めて階段を上っていった。

堂内の照明は暗く、本山である延暦寺の根本中堂と同じような造りとなっているのが分かった。入ると三仏を祀っている堂を右側から廻るように奥に行き、そこから階段を下りて堂の前に立つようになっていた。堂の前の参拝順路には、手前に勝道上人の木彫の座像があり、向き合う形で奥に天海大僧上の座像があった。勝道上人の像を見た時、あまりにも厳しい表情をしていたことが強く印象に残った。

三仏を祀る堂の前に立ったが正面は簾で覆われていて、賽銭箱はあるものの内部が全く見えず、簾越した灯明の明りが見えただけだった。はたしてこれでいいのだろうか。

本堂内には10分ほどいたであろうか、堂を出るとすぐバス停へと下りて行った。

2泊3日で日光修験の祖でもある勝道上人の足跡を訪ねたが、世界遺産となった二社一寺の方にのみ関心が高く、淋しさを感じたが、3日間、好天を与えてくれた勝道上人に感謝しながら日光を後にした。



平成の大修理もほぼ終わった大きな日輪寺本堂(三仏堂)。